

福澤諭吉の真実

～剣はペンよりも強し～

1. 福澤諭吉の生涯を『起』『承』『転』『結』の4区分で要約

★『揺籃期→『起』(1歳～18歳) →1835年に大阪で生まれ (5人兄弟の末子)
父百助の死後中津へ移り住む。12～13歳の頃白石照山から漢学を学ぶ。
(1853年ペリー来航。) 日本の歴史が激変する始まりとなる。

★『充電期→『承』(19歳～32歳) →海外で西欧文明に接する
1854年長崎に行き蘭学を学ぶ。1855年大阪に移り緒方洪庵の適塾に入門。
1858年藩の命令で江戸に出て、蘭学塾を開く。慶應義塾の起源となる
(1858年日米・蘭・露・英・仏と修好通商条約の調印。)
1959年横浜を見学して、蘭語が役に立たぬ事を知り、英語に転向する。
1860年～1867年にアメリカ2回、ヨーロッパ1回の海外視察を体験する。
国内では「攘夷」が旺盛の中「開国」を主張し1864年～1866年幕府を支持。

★『放電期→『転』(33歳～46歳) →日本の文明開化に努める
1868年江戸幕府が崩壊し明治維新となる。明治5年に『学問のすゝめ』
同8年に『文明論の概略』を出版。同13年に交詢社を起こす
同14年にいわゆる「明治14年の政変」が起き、方向転換を余儀なくされる。

★『収束期→『結』(47歳～66歳) →一身独立して一国独立する = 独立自尊
明治15年に『時事新報』を発刊 これを契機に「朝鮮の文明化」に深く関与
する。明治17年甲申政変(朝鮮改革派によるクーデター)にも福澤が関与。
同18年時事新報社説に「脱亜論」を発表し、朝鮮の守旧派を批判する。
同27年に起きた日清戦争を「文野の戦争」と称して積極的に支持する。
同31年5月『福翁自伝』を脱稿後、9月に脳溢血で倒れる。
同32年6月に『福翁自伝』を出版。自伝では1864年～1866年を語らない。
同34年2月に長逝 他界後5月に『瘠我慢の説』及び『丁丑公論』を出版。

2. 福澤諭吉の業績

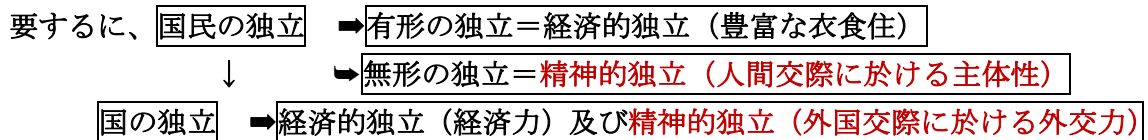
- (1) 三大事業は、「慶應義塾の創立」、「交詢社の設立」、「時事新報の発刊」
- (2) 三大著書は、『学問のすゝめ』、『文明論の概略』、『福翁自伝』

3. 福澤諭吉の理念→「独立自尊」（一身独立して一国独立する）

「一身独立して一国独立する」（学問のすゝめ 3編）・・・明治6年

全国民に独立の気力がなければ、一国の独立などありえない、と言っている。

1. 国民の独立には二形態あり、ひとつは有形の独立＝経済的独立であり、もうひとつは、**無形の独立＝精神的独立**である。経済的独立とは、衣食住に困らない事を言う。**精神的独立とは、「社会の交際、処世法において、自分の思う事を言い、自分の思う事を行動に移し、・・・秋毫の微も節を屈する事なき事を言う。」**
つまり、主体性ある発言や行動が出来る事を言う。
2. 国の独立にも二形態ある。経済的独立と精神的独立である。
経済的独立とは、その国の経済力であり、**精神的独立とは、その国の外交力**である。



4. 福澤諭吉の称賛に値する言動

1. 『婦人論』で「一夫一婦制」の意義を訴え、女性の地位向上に努めた。
2. 維新後には、政府から執拗なまでの勧誘にも拘らず、一切の官位、爵位、勲章、等々を辞退し、教育家、思想家としての道を歩んだ。
3. 「国民と国の独立」が「目的」であり、西洋文明の日本への導入は、その目的達成の「手段」であると主張し、「文明開化」に粉骨砕身努力した。
4. 「自立したら、世のため、人のため、国のために尽くせ」という名言を残し、自ら実践すると共に、周囲の人に奨励した。

5. 福澤諭吉の人間性、生きざま、性格、趣味、体格、嗜好品

1. 妻（錦）との間に4男5女を儲けた。家族を愛し、浮気は生涯ゼロ。
2. 身長 173.5 cm, 体重 65kg, （当時の平均身長は男子で 158.7cm）頑健。
3. 性格は短気、癩癩持ち、臆病で血を見るのが苦手。ヨーロッパで手術を見学中に卒倒。居合と米搗きと散歩で健康管理。二度チフスを患う。
4. 飲酒、喫煙の「両刀遣い」。飲酒は昼夜を問わず飲んだが酒癖は良い。
5. 「明治14年の政変」を契機に絶交した人物は、九鬼隆一と伊藤博文。
6. 趣味は、漢詩、和歌、俳句、観劇、落語と講談、相撲観戦、将棋。
7. 語学力は、蘭語は完璧。英語は読解力あり、作文は苦手、会話は下手。
8. 服装は、明治維新後も和装を好み、晩年はほとんど和装で通した。

9. 食生活は、生涯を通して和食が中心。好物は鰻、河豚、柿、からすみ。
10. 生涯に書き残した書簡は、全 2,564 通で、名宛人も約 600 人に及び家族、親族、慶應義塾関係者、友人知己、各界の著名人など人脈は大。
11. 金銭感覚は、華美を嫌い質素儉約質実剛健を好んだ。借金の経験なし。しかし、貧乏塾生や朝鮮からの留学生には惜しみなく金を貸した。

6. 福澤諭吉が主として一部の学者から批判されている言動

1. 『承』の時代で、批判されるのは、「幕府支持の言動」である。

1864 年～1866 年(29 歳～31 歳) 幕臣として幕府を支持し「幕府強化論を唱え 1866 年に「長州再征に関する建白書」を幕府に提出する。

2. 『転』の時代では、「矛盾した発言」により一部の学者から批判される。

(1) 『学問のすゝめ』7 編(明治 7 年 3 月出版)の一節での発言。

政府が人民の意に反して暴政を行った場合に人民が取る態度には、

1. 政府の暴政にも拘らず節を屈して政府に従う。
2. 徒党を組み武力を以って政府に立ち向かう。
3. 一寸の兵器も携えず片手の力を用いずただ正理を唱えて政府に迫る。

以上の三つがある。この中で正しい人民の態度は 3 番であると説く。同様の考え方で、『学問のすゝめ』6 編では赤穂浪士の行動を批判。

(2) 『丁丑公論』諸言(明治 10 年脱稿)での発言。

「凡そ人として我が思う所を施行せんと欲せざる者なし。即ち専制の精神なり。・ ・ 政府の専制は咎むべからざるなり。・ ・ ・ 咎むべからざると雖も、之を放頓すれば際限あることなし。又これを防がざるべからず。今これを防ぐの術は、唯これに抵抗するの一法あるのみ。世界に専制の行われる間は、之に対するに抵抗の精神を要す。・ ・ 近来日本の景況を察するに、文明の虚説に欺かれて抵抗の精神は次第に衰退するが如し。・ ・

今、西郷氏は政府に抗するに武力を用いたる者にて、余輩の考えとは少しく趣を殊にする所あれども、結局その精神に至っては間然すべきものなし。

余は西郷氏に一面識の交わりもなく、又その人を庇護せんと欲するに非ずと雖も、特に数日の労を費やして一冊子を記し之を公論と名づけたるは、人の為に私するに非ず、一国の公平を保護せんが為なり。」

「抵抗の精神があれば、武力で政府に対抗しても良いのか？」
これは、明らかに『学問のすゝめ』7編の言説と矛盾する。

3. 『結』の時代では「軍備拡張論」を主張して一部の学者から批判される。

「**ペン**は**剣**よりも**強し**」は福澤諭吉の名言である」と思うのは間違いである。

この言葉を最初に言った人は、「ポンペイ最後の日」の作品でも有名な、イギリスの小説家、劇作家、政治家の、ブルワー・リットンである。彼の戯曲「リシュリユー」の第二幕、第二場の中で出てくる名言である。(19世紀初期)

確かに慶應義塾の塾章はペンマークであるが、決まった経緯は下記である。明治18年頃には慶應義塾の学生の制服が和服から洋服になりつつあった。帽子には、数人の学生が「ペンマークが良いのではないか」と福澤諭吉に相談した所「それでよかろう」ということになり、正式には明治33年に承認された。

しかし、ペンマークとは対照的に、『結』の時代では、福澤は「軍備拡張論」を「時事新報」社説で政府に訴えるのである。明らかに**剣はペンよりも強し**である。

[0] 明治15年の「壬午軍乱」は清国が鎮圧する。日本との軍事力の差は歴然。

[1] 明治17年の「甲申政変」(改革派によるクーデター)では、朝鮮の独立党(改革派)を支持し、**彼等に武器弾薬の供与**を行っている。

[2] 甲申政変で、金玉均や朴泳孝等改革派の家族が、朝鮮で処刑されると、福澤は涙ながらに「**脱亜論**」を執筆し時事新報で訴える。内容は、「朝鮮(清国も含め)のような野蛮な国とは今後は絶交し、西欧との交際に徹する」というもので、激しい口調で朝鮮を批判した。

それからの 10 年間（明治 27 年の日清戦争勃発までの間）福澤は、甲申政変が失敗したのは、清国から守旧派への応援があり、日本が清国と戦って敗れた原因は、「**軍事力の差**」であると主張し、時事新報で**日本の軍事力増強**を、政府に強く訴える。但し、日本国を防衛するための「軍備拡張論で」あった。

（以下は「**軍備拡張**」に関する「時事新報」の社説の見出しである。）

（明治 15 年）

- 0.朝鮮の変事（7月31日～8月1日）・・・必ずや充分の軍備なかる可らず。
- 1.東洋の政略果たして如何せん（12月7日～12日）明治初期から今日まで、インフラ整備に力を注いできたが、軍備を優先すべきであったと強く反省の弁を語っている。

★ この時点で、福澤は日本の「**軍備拡張**」が急務であると確信する。

（明治 18 年）

- 3.非軍備拡張論者今如何（1月29日）
- 4.脱亜論（3月16日）（「福澤論吉年間29」の33～50頁「脱亜論とその周辺」を参照）
- 5.兵備拡張論の根拠（3月26日、27日）
- 6.朝鮮人民のために其国の滅亡を賀す（8月13日）→新聞発行停止処分を受ける。
- 7.朝鮮の滅亡は其国の大勢に於て免る可らず（日付けなし）→新聞に掲載されず。
- 8.兵備拡張（12月11日）

（明治 25 年）

- 9.軍艦製造費の否決に対する政府の覚悟は如何（1月12日）

[3] 明治 27 年に日清戦争が勃発すると福澤は積極的に支持する。

（明治 27 年）

- 11.* 日清の戦争は文野の戦争なり（7月29日）・・・文明と野蛮の戦争と定義づける。
- 12.朝鮮の独立（9月29日）「日清戦争の原因は朝鮮改革の問題にして、日本の目的は朝鮮をして支那の羈絆を脱せしめ、其の国事を改良して独立の基礎を全ふせしめ・・・」

（明治 28 年）

- 16.容易に和す可らず（1月17日）
- 17.外国干渉の説、聞くに足らず（1月18日）
- 17.軍備拡張と外交（3月8日）

21.軍艦製造の目的 (7月16日)

22.軍備の充実 (7月24日)

23.米国に軍艦を注文す可し (7月26日)

24.軍備拡張に対する政府の覚悟如何 (8月30日)

25.軍備回復 (9月25日)

[4] 日清戦争が終結しても、福澤の軍備拡張論は、逝去の3年前まで続く。

(明治29年)

28.軍備拡張掛念するに足らず (3月21日)

29.海陸並行 (4月14日)

30.軍備と実業 (4月18日)

31.軍備拡張に官民一致 (8月11日)

32.尚武は日本人固有の性質なり (10月3日)

33.軍備拡張は戦争の用意に非ず (10月6日)

34.軍備は海軍を主とす可し (10月7日)

35.海軍拡張の急務 (10月8日)

36.海軍拡張の程度と国力 (10月9日)

37.戦時に於ける海軍の効用 (10月13日)

(明治30年)

39.海軍の士気を奮励す可し ((2月12日)

40.内国にて軍艦の製造 ((2月17日)

41.軍備縮小説に就いて (2月25日)

42.戦勝の虚栄に誇る可らず (6月30日)

43.軍備は無用を目的とす可し (7月3日)

44.実業家の軍備縮少運動に就いて (11月14日)

(明治31年)

45.海軍拡張の外ある可らず (1月20日)

46.海軍拡張止む可らず (1月30日)

47.海軍拡張の必要 (2月26日)

[4]. 『結』の時代に、「江戸城無血開城」を巡る勝海舟批判で賛否両論あり。

福澤は明治24年に『瘠我慢の説』を脱稿し明治34年1月(死の直前)に公表。福澤は勝海舟と榎本武揚に対して批判する。勝に対しては、戦わずして江戸城を官軍に引き渡したのは、300年続いた三河武士の武士道精神を損傷させたとし、さらに田舎にでも引っこめば許されるが、新政府に仕えて勲章まで貰った。榎本に対しては、官軍と最後まで戦った事は称賛に値するが、その後(福澤の口利きで無罪放免になったにも拘らず)やはり新政府に仕えて高位高官になり、勲章や爵位をさずけられた。……という内容の批判である。

ここで問題となっているのは、勝海舟の江戸城無血開城である。

福澤は、一時は幕府支持であり、その後倒幕賛成派になるが、維新戦争では幕府にも与せず、官軍にも与せず、中立を保ち上野戦争で官軍と幕府軍がドンパチをやっている時に、慶應義塾でウエーランドの講義をしていた。論争では幕府を倒したいのに中立の立場を採った諭吉が、海舟を批判する資格があるのかが問われている。勝海舟の死（明治年32年）後に公表した事も問題である。

7. 福澤諭吉と幕末・維新の傑物との人間関係

1. 勝海舟との関係 ×

1860年に咸臨丸でアメリカに行った時に始まり、西南戦争の後に金銭的に困窮し福澤が金を借りに勝の所へ行った時、明治18年に洋楽の某氏の27回忌の法要で会った時、の三回の出会いがあるが、確執の関係であった。馬が合わない。

2. 伊藤博文との関係 △→×

明治14年の政変を契機に、二人の関係は絶交状態になった。

3. 大隈重信との関係 ◎

無二の親友であり、両家は親戚同様の交際であった。福澤の葬式では唯一大隈からの献花だけが許可された。

4. 西郷隆盛との関係 ◎

両者は一面識もなかったが、福澤は西郷の言動を評価し、西郷も福澤の著書を愛読し、互いに相手を尊敬する関係であった。

5. 後藤象二郎との関係 ◎

諭吉が最も惚れ込んだ国会議員であり、経営破綻による高島炭鉱売却の件でも岩崎弥太郎に働きかけて事態を收拾するなど家族ぐるみで交際した。

6. 大村益次郎との関係 ◎→△

緒方洪庵の適塾での親友であったが、ヨーロッパからの帰国後、彼が尊王攘夷の活動家であることが判明し疎遠になった。

7. 岩倉具視との関係 ○

維新後の政局で、岩倉は福澤の論説を最も重視した。

8. **木戸孝允との関係** ○

維新の三傑の内、福澤は木戸と最も親しく往来した。

9. **大久保利通との関係** △

維新後、両者は3回会談した。大久保は福澤の見識を高く評価し、政府の要職に迎えようとしたが、伊藤博文が反対して実現しなかった。

10. **黒田清隆との関係** ○→×

維新後親交を重ねたが、明治14年の政変で断絶した。

11. **井上馨との関係** ○

明治14年の政変を契機に、しばらくはギクシャクした関係であったが、伊藤博文との関係のように絶縁関係にはならず、ケースバイケースで付き合った。

12. **板垣退助との関係** △

福澤は「自由民権運動」の激化を好まず、板垣は福澤の「分権論」に感激するも、並の交際であった。

★ 福澤は、**西郷**、**後藤**、**大隈**、というような、寛大で、細節に拘泥しない、しかも大切なツボを外さない、人物が好きであった。

8. 福澤諭吉を正当に評価する学者及び厳しく批判する学者

(1) 福澤諭吉を正当に評価する学者

1. 丸山眞男 (まるやままさお) 東大法学部日本政治思想史(1914-1996)
2. 松沢弘陽 (まつざわひろあき) 東大法学部・丸山の弟子(1930～)
3. 板野潤治 (ばんのじゅんじ) 東大文学部国史学科(1937～)

(2) 福澤諭吉を厳しく批判する学者

1. 服部之総 (はっとりしろう) 東大文学部社会学科(1901-1956)
2. 遠山茂樹 (とうやましげき) 東大文学部国史学科(1914-2011)
3. 安川寿之輔 (やすかわじゅのすけ) 名古屋大教育学部(1935～)

以上